

【緑地を楽しむ本】

『野に咲く花の生態図鑑』

多田多恵子・著 河出書房新社



今、緑地の中央広場はスマレのじゅうたん。毎年、季節を忘れずにちゃんと咲いてくれるのですね。

でも、私が気づくのは花が咲いている時だけ。ほかの時期は一体どうなっているのでしょうか？『野に咲く花の生態図鑑』の最初のページも、スマレから始まります。

なんとスマレには、いつも私たちがよく見ている花が終わった後、

閉鎖花という開かない花が咲くそうです。閉鎖花は開かないので、虫などに花粉を運んでもらうことはできません。花の中で花粉が雌しべにくっついて自家受粉し、確実に種ができるのです。自分の花粉が雌しべについた場合は全く親と同じ遺伝子です。虫が他の花の花粉を持ってきてくれた場合は、遺伝子が変わります。どちらがスマレにとって都合がよいでしょう。今と同じ環境なら、親と同じほうが危険は少ないでしょう、でも、環境が変化したとすると、親と違う遺伝子のほうが生き延びるチャンスが

あるかもしれません。スマレは両方のタイプの子孫を作って、どんな場合にも生き延びて領土を拡大しようとしているのです。

スマレの種は熟すとパチッとはじけ、2m以上も飛び散ります。その上、種はアリが大好きなお土産つき。アリが種をもっと広い範囲にばらまいてくれます。このお土産、普通の花と閉鎖花で、どちらが大きいと思いますか？新天地を開拓してほしい開放花の種のほうが大きいお土産をつけて、アリを誘っているのだそうです。ここまできると、スマレには知能があるとしか思えません！

「スマレさん、あなた、そんなことまで考えていたの？」と緑地のスマレに声をかけてみました。スマレは「ウフツ」と笑ったように思えましたよ。

スマレ以外にも、こんなすごい話がまだまだいっぱい。今年の私は、花を見つけるたびに本を開いて、この花はどんな戦略を持っているのかな？と確かめていることでしょう。

(小川)